

妃は陛下の幸せを望む2

登場人物
紹介



リアンカ

妃の一人で、
伯爵令嬢。
正妃になるため、
何やら企んでいる
ようで……？



エマーシェル

妃の一人で、男爵令嬢。
素朴な性格で、国王の
よき話し相手となっている。



イーシャ

『暁月』という名で
知られている、
裏社会で有名な
なんでも屋。



アマリリス

妃の一人で、
侯爵令嬢。
引きこもりがちだが、
レナのことを
心配している。



サンカイア

妃の一人で、豪商の娘。
実家の情報網を駆使して
レナに協力している。



ディアナ

妃の一人で、公爵令嬢。
国王の幼馴染で、
レナの協力者でもある。



レナ

国王の妃の一人で、侯爵令嬢。
大好きな彼のため、
自分にできることは
なんでもしようと奔走中。



アースグラウンド

アストロラ王国の国王。
後宮の妃たちに
あまり興味がなかったが、
最近妙にレナのことが
気になっている。

目次

妃は陛下の幸せを望む2

7

正妃になってからのこと

187

妃は陛下の幸せを望む2

「ひっく……ひっく……」

十年前の、ある晴れた日。

まだ幼かった私はお城のパーティーから抜け出して、中庭で泣いていた。

六歳になった私は父に連れられ、その日生まれて初めてパーティーに出席した。

ミリアム侯爵家の令嬢として相応しい振る舞いをしようと意気込んでいたのだが、少し年上の侯爵令嬢に「ここはマナーのなっていないお子様が来るところではなくてよ」と意地悪を言われてしまったのだ。

蔑むような目で睨まれて、身が竦んだ。

どうしていいかわからず、私は会場を飛び出してしまった。

「ふえっ……うっ……」

貴族令嬢たるもの、これくらいのことではダメだとわかっていた。わかっていても、溢れる涙を止められない。

私は人目を避けて庭の隅にうずくまっていた。

その時、背後から声が聞こえた。

「誰かいるのか？」

私は驚いて顔を上げる。

すると、見たことがないくらい綺麗な少年が現れた。

あまりにも整った顔立ちに目を奪われて、涙が止まる。

パーティーで言われた意地悪なんかどうでもよくなってしまった。

心臓が激しく脈打つのがわかる。

この国では珍しい漆黒の髪が、強く目に焼きついた。

私は真っ黒な髪を持つ人を、それまで見たことがなかった。

瞳は晴天を思わせる青色で、質のいい布を使った上等そうな服が、少年の美しさを引き立てている。

「どうしたんだ？」

少年はそう問いかけてきた。声には、私を心配するような響きがある。

「えっと……」

「泣いていただろう？ 何かあったのか？」

「……パーティーで……他の子に、意地悪なことを言われちゃったの。私……っ、い、一生懸命、

頑張っていたつもりだったけど……っ。全然、できていないって……」

わけを話していると、また涙がこぼれてきた。

社交の場に相応しい振る舞いをしようと、一生懸命頑張っていたつもりだった。でも、初めてのパーティーに浮かれていて、マナーが疎かになつていたのかもしれない。

「そうなのか……もしかして、パーティーは初めてか？」

「はい……」

私が涙を流しながら小さく頷くと、彼は目の前にしゃがみ込んで優しく話しかけてきた。

「初めてのパーティーでそんなことがあつたなんて、大変だったな。けれど貴族が集まる場ではよくあることもある」

彼の声は穏やかで、聞いていると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。

「誰だって最初は上手くいかないものだ。次からは失敗しないように注意すればいい。そうやって人は学んでいくんだよ」

「そう、なの？」

「ああ。だからそんなに落ち込む必要はない。これから頑張ればいい。もう泣くな」

そう言つて、彼はハンカチを差し出した。

私を安心させるような、優しい笑みを浮かべている。

最初はその美しさに……そして次はその優しさに、私はどうしようもないほど心惹かれた。

ハンカチを受け取り、彼の目を見つめて口を開く。

「……貴方のお名前は？」

「アースグラウンド・アストロラ。この国の王太子だよ」

私の問いに、美しい少年は微笑んで答えたのだった。

「レナ様、お目覚めの時間ですよ」

侍女の一人であるカアラの声で目が覚める。私——レナ・ミリアムは、後宮の自室にあるベッドから体を起こし、ぐっと伸びをした。

「……ずいぶん懐かしい夢を見ていたわ」

夢の内容を思い出しながらそうつぶやくと、カアラが大きな茶色の目を、興味深そうにこちらに向ける。

「どんな夢だったのですか？」

「昔のことよ。陛下と出会った時のことを夢に見たの」

「だから幸せそうな顔をなさっているのですね」

カアラが私の着替えを用意しながら微笑む。

私はあの日、アストロラ王国の王太子だったアースグラウンド様に恋をした。

それからというもの、あの方の力になるために様々な努力をしてきた。

外見を磨き、貴族令嬢としてのマナーを身につけ、少しでも多くの知識を得ようと勉強に励んだ。

そうして十年が経ち——

十六歳になった私はいま、国王となったアースグラウンド様の妃として後宮にいる。

この国では、国王や王太子の伴侶を選ぶため、その候補となる令嬢たちを後宮に集める決まりがある。

普段、後宮は閉鎖されており、正妃や側妃を決める時にのみ建物が開かれてきた。そこに各地から妃たちが集められ、その中から正妃や側妃に相応しい者を選ぶという仕組みだ。

王太子になればいつでも後宮に妃を集められるようになるのだが、たいていは王位を継いでから正妃を選ぶ。正妃と同時に側妃を選ぶ場合もあれば、生涯側妃を持たない場合もある。

アースグラウンド様は前国王夫妻が急逝したため若くして王座につき、それと同時に後宮に妃が集められることになった。

私もそうして集められた妃の一人である。

カアラが手渡してくれたガウンを羽織って椅子に座ると、部屋の扉をノックする音がした。

「レナ様、お茶をお淹れしましたわ」

そう言っ、侍女のフィーノとメルディノが部屋に入ってきた。その後ろには、同じく侍女のチエリもいる。

いま入ってきた三人とカアラは、私が育てた侍女だ。

私は幼い頃に、孤児だった彼女たちを引き取り、様々な能力を身につけさせた。陛下の力になる

ため、自分の手足として動いてくれる味方が欲しかったのだ。

彼女たちは、普通の侍女としての仕事を完璧にこなすだけでなく、戦闘や諜報活動も得意として
いる。

この後宮では、私の命令で情報収集を行ったり、護衛をしたりしてくれていた。
彼女たちとは幼い頃から共に過ごしてきたため、気心の知れた仲だ。

私のためならなんだってできると言ってくれるこの子たちのことを、私は本当に信頼している。

「レナ様、お茶を召し上がっている間に、少しご報告してもよろしいでしょうか？」

侍女たちの中で一番背の高いフィーノが、テーブルの上にお茶の入ったカップを置きながら
言った。

「いいわよ。何か新しい情報でも手に入ったのかしら？」

「いえ……それが何も得られていなくて……」

フィーノが悔しそうな顔をする。彼女の言葉に頷きつつ、チェリも口を開いた。

「ベッカ様が処罰されて以来、いまままで騒がしかったのが嘘のように、後宮内は静まり返って
います」

この国の後宮では、正妃の座をめぐる妃同士争いが絶えず、命の危険にさらされることも珍
しくない。

数週間ほど前、私はパーティーで毒を盛られかけ、その後暗殺者に襲われた。

暗殺者を差し向けたのは、妃の一人であったベッカ・ドラニア伯爵令嬢。

ベッカ様は、陛下に近づこうとする妃に嫌がらせをしたり、下級貴族の妃をいじめたりしていた。
さらに彼女は私を殺そうとしたばかりか、外部の男を後宮に引き入れて密通し、妊娠したら陛下
の子供だと偽ろうとしていたのだ。

結局のところまだ妊娠していなかったようだが、ともあれそれらの悪事が明るみになり、ベッカ
様は処罰された。

ただ、彼女はパーティーで私の飲み物に毒を仕込んだことについては認めなかった。

私はパーティーの夜以外にも何度か暗殺者の襲撃にあっていたのだが、その犯人もベッカ様では
ないらしい。

ベッカ様が犯人ではないとすると、疑わしいのは同じ伯爵令嬢であるリアンカ・ルーメン様だ。
彼女はベッカ様と正妃の座をめぐる対立していたし、他の妃たちへのいじめも行っていた。正
妃になることに、相当執着しているのだろう。

だけどリアンカ様が毒を盛ったという証拠も、暗殺者を雇っていたという証拠もなかった。

とはいえ、リアンカ様が正妃になるために何かしようとしているのは間違いない。

もし、陛下が選んだ妃が力を持たない下級貴族だった場合、リアンカ様に潰されてしまうかもし
れない。

陛下が何不自由なく正妃を選べるようにするため、私は特にリアンカ様の動きに注意していた。

だけど……

「……平和だわね」

陛下やその部下がベツカ様の対応に気を取られている隙に、リアンカ様が目障りな私を亡き者にしようと動き出す可能性は十分にあった。

けれど、リアンカ様は動かなかった。

「平和なのはいいことではないですか」

メルがそう言つて笑う。

「ええ。確かにそうだけれど、こうも急に静かになると、少し不安になるわ。でもリアンカ様はエマーシエル様のことに感づいたわけでもなさそうだし……本当に大人しくしているだけなのかしら。それとも水面下で何か企んでいるのかしら」

後宮には、エマーシエル・ブランシュ様という男爵令嬢がいる。

およそ貴族令嬢らしくない純朴な少女であるものの、どうやら陛下は彼女のことを気に入っているらしいのだ。

集められた妃の中から正妃を選ぶ過程で、国王や王太子は妃たちと体の関係を持つ。

どうやらいまの陛下——アースグラウンド様は妃を抱くことを国王としての義務だと考えているらしく、夜伽の時には必要最低限の会話しか交わさず、妃と共に夜を明かすこともない。

ところが、夜伽以外では後宮に近づきもしなかった陛下が、ある時からエマーシエル様に会うた

めに昼間に後宮を訪れるようになったのだ。

私が気づいた時には、まだ他の妃たちはこのことを知らなかった。けれど知られてしまえば、エマーシエル様の身が危険にさらされるだろう。

エマーシエル様は私のように護衛のできる侍女を連れていないし、そもそも彼女は警戒するということを知らないようで危なっかしい。

だから私はエマーシエル様を守るため、陛下が会っているのは私だという噂を流すことにした。いまのところ私の企みは上手くいって、リアンカ様はもちろん他の妃たちも皆、その噂が嘘だと気づいていない。

「エマーシエル様のことはバレていませんわ。彼女の周囲にも変わった様子は見られません」

「大丈夫ですよ、レナ様。ベツカ様が処罰されたのを見て、リアンカ様も大人しくしているのかもしれませんし」

侍女たちが口々に言う。

彼女たちの言う通り、リアンカ様が慎重になっているという可能性はあるだろう。

「でも……リアンカ様は正妃になることを諦めたりしないでしょうね」

「それは、そう思いますわ」

私の言葉に、カアラが真面目な顔をして頷く。

リアンカ様は、ベツカ様の件を受けて多少やり方を変えるかもしれないが、基本的に行動を改め

ることはないだろう。その証拠に、彼女は表立った動きは控えているものの、自分の味方の妃たちとはマメに会っている。

何かを企んでいるかもしれないし、警戒することは決して無駄ではない。

「レナ様、もし何かあっても、私たちが絶対にレナ様を守りますわ」

フィーノがそう言って笑ってくれる。

「ふふ、ありがとう。フィーノ」

心からの言葉だとわかるからこそ、本当にこの子たちが好きで、大切だと改めて思う。

「貴方たちがいてくれるとはいえ、何が起るかわからないのだから警戒はしておくべきだわ。暗殺者という手は使えないと証明されたようなものだし、いままでとは違う手段で何か仕掛けてくるかもしれないもの」

ベッカ様が私に暗殺者を差し向けて失敗したことは、既に後宮中の妃たちの知るところとなつて
いる。

つまり、私を害するために暗殺者を送り込んでも、そう簡単にはいかないと思わしめたようなもの
のだ。

それを理解したうえで私を排除しようとする者がいるならば、もつと別の行動を取るはず。

その別の行動がなんであるか、というのが問題だ。

「そうですね。そもそもあの程度の暗殺者で、私たちの大切なレナ様を殺せると思っっているのが間

違いですわ。まあ、どんな手を使ったとしても、私たちがいる限り、レナ様を傷つけさせはしない
のですけれど」

「レナ様のことは絶対に守ってみせます」

フィーノに続いて、チェリもそう言ってくれた。

「ありがとう。私も貴方たちくらい強ければよかったのだけど……」

貴族の令嬢には不要な力だろうけれど、私はある程度の護身術を身につけている。けれどこの後
宮で身を守るには十分だとはいえない。もつと私に戦う力があつたら、この子たちを危険な目にあ
わせることなく自分の身を守るのに。

そうした力があれば、陛下のことも守れたらと思う。

「守るのは私たちの仕事ですから。レナ様は自分のやるべきことをやってください」

「そうですよ。レナ様にそんな力があつたら、私たちのお役目がなくなってしまうすし」

私の言葉に、フィーノとチェリが答える。

ちょうどその時、ドアをノックする音が聞こえて、三人の侍女が入ってきた。

私が妃になった際に、後宮側から新しく付けられた侍女たちだ。

三人が私に一言ずつ挨拶すると、フィーノ、メル、カアラが彼女たちに仕事の指示をするために
私の傍を離れた。

その様子を眺めながら、フィーノに淹れてもらったお茶を飲む。茶葉の香りが口の中に広がると、

ふっと肩の力が抜けた気がした。

たとえ私に身を守る力があつたとしても、一人で全てのことができるわけではない。だから、こうして侍女たちの力を借りているのだ。

私の足りない部分を補ってくれる彼女たちには、感謝してもしきれない。彼女たちがいなければ、私は自分の目的を達成しようとする中で、もつともどかしい思いをしていただろう。

私の目的とは、陛下を幸せにすることだ。

そのために私は、陛下が心から愛する方に、正妃になってほしいと思う。

人を愛いとしいと思うことは、とても幸せなことだ。

私はそれを、陛下に恋すること知った。

貴族社会では政略結婚が当たり前だけれど、もし陛下が自分の愛する人と生涯を共にできるなら、きっと陛下の人生は豊かで幸福なものになるだろう。

陛下はエマーシエル様のことを気に入っているようだけれど、それが恋愛感情なのかどうかはまだわかっていない。

私は早く陛下のお考えを知って、あの方の望む妃を正妃にするために行動したいと思っている。けれど後宮が荒れているままではそれも難しい。だから私はまず、陛下が自由に正妃を選べるような環境を整えようとしているのだ。

陛下のお考えを探ることと、後宮を平和にすることを同時にできればいいのだが、なかなかそこまでは手が回っていなかった。

陛下が正妃に望んでいる妃とは誰なのだろうか。

私が聞いたところで陛下が答えてくださるとは思えないけれど、もし教えてくださるならば、私は喜んでその方を正妃にできるよう手助けするのに。

そんなことを考えていると、どうしようもないほど陛下への思いが溢あふれてきて、胸がいつぱいなる。

後宮に来て、陛下に何度も抱かれて、こんなにも私の心を動かすのは、やはり陛下だけだと感じた。

私が冷静ではいられなくなるくらい激しい恋心を抱いてしまう相手は、陛下だけなのだ。

「レナ様、ぼーっとしていますか、どうしましたか？」

物思いにふけてっていると、すぐ傍そばに控えているチェリが顔を覗き込んできた。

「陛下のことを考えていたの。あの方は結局のところ、誰を正妃にしたいと思っていらっしゃるのかしら？」

陛下がエマーシャル様と昼間に会っていることを知ってから、陛下が彼女に恋しているのかどうか調べたり、彼女が正妃になることを想定してみたりした。

もし陛下がエマーシエル様を正妃にと望まれたなら、正妃に必要な知識やマナーを教えて差し上

げられるよう、準備もしてある。

けれど、実際の陛下のお心を知ったうえで動いていたわけではないのだ。陛下と私の距離は決して近くはなく、その願いを知れるほどの仲ではない。

「さあ……それは私にもわかりかねます。ですが、カアラがトールウィン様に探りを入れているので、そのうち何かわかるのではないのでしょうか」

トールウィン様というのは陛下直属の文官で、カアラに思いを寄せている青年だ。

ひよんなことから彼と協力関係を結ぶことになって以来、頻繁に情報のやり取りをしている。

そこで私は、ふとあることを思い出す。

「そういえば……最近陛下の様子が少し変なように感じるの」

チェリにだけ聞こえるよう、小さな声で言った。

思い返せば、ベツカ様が処罰されたあとくらいから、陛下の様子はおかしかった。ベツカ様が後宮を去ってから初めて陛下が私のもとを訪れた夜、私に何かを言おうとしていたけれど、結局何も言わなかったのだ。

そして最近になって、ただ淡々と義務を果たすためだけに私のもとを訪れていたあのほうが、自分から私に話しかけてくるようになった。

今日は何をしていたのかとか、どんな紅茶が好きなのかとか、そんな他愛のないことばかりだけれど、いままでの陛下の態度からは考えられないことだ。

陛下は私がエマーシエル様を守るために嘘の噂を流していることに気づいている。そのせいで私は、何かよからぬことを企んでいるのではないかと疑われてさえたのに。

私に話しかけてこられるのは、何かお考えがあつてのことなのだろうか？

余計なことで陛下のお手を煩わせないためにも、あの方が何を思っていらっしゃるのか、わかれ方がいいのだけれど……

カアラがトールウィン様から何か聞いているかもしれない。そう思つてチェリに尋ねてみると、彼女はなんともいえない顔をした。

「どこことなく喜んでるようにも見える。」

「チェリは心当たりがあるの？」

「はい、少し」

「……それは？」

「まだ断言できるわけではないので、確認してからご報告します」

そう言われてしまった。

確認してからとは言うものの、彼女の表情からして、既に何かを確信しているのではないかと
思う。

けれど、私の信頼する侍女がいまは言うべきではないと判断しているのだから、無理やり聞き出すのはやめた。

とはいえ、ずっと陛下をお慕^{した}いしている私にもわからないことが、侍女にはわかつているようなのが少し悲しい。

彼女よりは陛下の近くにいたはずなのに、あの方の態度が変化した原因を推測すらできないだなんて……

もっと頑張らなければ。平和で落ち着いた日々もいいけれど、何も考えずにゆっくりしているわけにはいかない。

ベッカ様が処罰されたことによる影響について考えなければならぬし、陛下とエマーシエル様の関係についてももっと詳しく調べていく必要がある。

今度、エマーシエル様に会いに行ってみようかしら？

でも、陛下が私のもとに通っているという噂を流しているいま、私が動けば目立ちすぎる。

彼女と私の仲が良いと、他の妃たちに誤解される可能性もあるだろう。

そうなれば、エマーシエル様がリアンカ様から目を付けられてしまうかもしれないし、彼女に協力している他の妃たちからいじめられてしまうかもしれない。

そうならないためにエマーシエル様のフォローをしてきたのに、私が動くことで注目されるなんて本末転倒だ。何か別の方法を考えなくては。

リアンカ様の動きについても、引き続き注意していきたい。このまま何も動きがないようであれば、こちらも対応を考え直さなければならぬ。

まだなんの証拠もつかめてはいないけれど、正妃になろうとして人を攻撃することも辞^じさなかつたリアンカ様のことだ。きつと何か企^{たくら}んでいるだろう。それを把握できていないというのは、私が後^ご手に回っている証拠だ。

私は次の一手をどうすべきかと、頭を悩ませるのであった。

*

俺——アースグラウンド・アストロラは後宮に向かいながら、これから会う妃のことについて考えていた。

彼女の名はレナ・ミリアム。

第一印象は、ごくごく普通の貴族令嬢といったところだった。

だから彼女も、ベッカ・ドラニアやリアンカ・ルーメンと変わらず、正妃の座を狙っているのだと思っていた。

でもそうであるにしては、レナ・ミリアムには奇妙な行動が目立つ。

後宮で諍^{いさか}いを起こしていた伯爵令嬢たちと真っ向から対立したかと思えば、下級貴族の娘であるエマーシエル・ブランシュをかばうような行動も取り始めた。

俺はレナ・ミリアムの行動を不審に感じるようになった。

彼女は、俺の幼馴染であるディアナ・ゴートエアや、直属の部下であるトウイン・カサルを次々と味方につけていった。

ディアナやトウインは馬鹿ではないし、俺は彼らを信頼している。

けれどどうも不可解な行動をしているレナ・ミリアムを、彼らがなぜ信用するのかわからなかった。

もし彼女に上手く丸め込まれているのなら、俺が警戒しておかなければならない。

そう思っていた。

しかしベッカ・ドラニアが起こした事件にまつわる報告を聞いている時に、トウインからレナ・ミリアムの行動の理由を聞かされた。

『レナ様は、陛下を愛しているから行動しているだけですよ』

それまで俺はずっと彼女のことを疑っていたので、簡単には信じられなかった。

けれどもし仮に、彼女が俺のために動いていたのだとすると、不可解な行動にも説明がつくような気がする。

トウインの言うことを鵜呑みにするわけにはいかないが、レナ・ミリアムが俺に好意を抱いているのだとしたら、何を目的として動いているのだろうか？

最近の俺は、彼女に興味を持ち始めていた。

後宮にあるレナ・ミリアムの部屋の扉をノックすると、彼女が笑顔で迎え入れてくれる。

「ごきげんよう、陛下」

そう言っただけで彼女の顔を、美しいと感じた。

レナ・ミリアムは、黄金に輝く髪を持つ、整った顔立ちの少女だ。歳のわりに大人びているけれど、歳相応の愛らしさも持ち合わせている。

でも、彼女の笑顔は作り物のようだと思う。

いや、実際に笑みを作っているのだろう。

貴族令嬢としてそつがなく、相手に不快感を抱かせるわけでは決していないが、全く本心が読み取れない。

その笑みを見ていると、彼女の全てが怪しく思えて、俺は疑心暗鬼になっていた。けれどいまは、戸惑いのほうが大きい。

彼女が俺のことを好いているのかもしれないと思うと、どう接していいのかわからなくなるのだ。トウインが言ったことを信じているわけではない。

けれど本当にレナ・ミリアムが俺のために動いてくれているのなら……

「少し……話をしないか」

気がついたら、そんなことを口走っていた。

レナ・ミリアムがやや驚いた顔をしたように思えたが、次の瞬間にはいつもの貴族令嬢らしい笑みに戻っていた。

「陛下のお望みとあれば、喜んで」
彼女はそう言つて俺を部屋いむらの奥へと誘いざなう。

俺がこんなことを言うのは珍しい。
妃たちを抱くのは、国王としての責務でしかないと思っている。彼女たちとは必要以上に親しくしないようにしていた。

正直に言うと、あからさまに媚こびを売つてくる女たちが苦手だったというのもある。
だが国王として、結婚はするべきだ。

王族の血が途絶えるということは、国の存亡にかかわる。

だから、俺が子をなすのは当然のことだと理解はしていた。

ただ、できれば愛のない結婚ではなく、互いに思い合える相手と添とい遂とげたい。

もし愛し合うことが難しくても、せめて互いに尊重し合えるような関係を築きたい。

夫婦仲が良い両親を見て育った俺は、密ひそかにそんな思いを抱いていた。

とはいっても、高望みはできないだろうが……

国王の結婚ともなれば政治的なメリットがもつとも優先される。

正妃の決定権を持っているのは俺だが、貴族たちの力関係や、有力貴族の意向を無視するわけにはいかない。

しかも俺は急遽きんげん王位を継ぐことになったため、自分の意見を通すだけの力もない。

後宮を適切に管理することすらままならないのが現状だ。だから妃たちが起こす問題への対応は、いつも後手ごてに回っている。

「それで、どのようなお話をいたしましょう？」

レナ・ミリアムに話しかけられて、はっと我に返る。彼女はベッドのほうを示して俺に座るように促うながしながら、にこにここと微笑えいごんでいた。

彼女に聞かれて初めて、特別に話したい話題があつたわけではないと気づく。

ただ、レナ・ミリアムと言葉を交わしたかっただけだ。

俺は気恥きぢずかしさをごまかすように、黙つてベッドに座つた。

レナ・ミリアムはいつも笑っている。

俺がどんな態度を取ろうとも、彼女の笑顔は変わらない。

少し前まではそれが不気味で仕方なかったけれど、いまはなぜかもどかしく思う。

「レナ・ミリアム、お前は……何を考えているんだ？」

「ふふ、私はいつも陛下の幸せを願っておりますわ」

はぐらかされてしまった。

それでも俺は彼女の気持ちを知りたいと思っっている。

何を考えているのだろうか。

俺の味方ではないようとしてくれているようには見えるが、それはなぜなのか。

本当に、俺のことを愛してくれているのか——
そんなことを考えるけれど、もちろん直接聞けるはずがなかった。

*

陛下の訪れがあった次の日。

いつものように自室で目覚めた私は、陛下に抱かれた幸福に浸っていた。
私の全ては陛下のためにある。

私にできることならなんだってやりたい。

そんな思いがとめどなく溢れてくる。

いま私が陛下のためにできることは、ベツカ様が処罰されたことで落ち着いた後宮が、再び荒れないようにすることだ。

この平穏な空気を乱す人物がいるとすれば、それはきつとリアンカ様だと思う。

リアンカ様は、私が流した偽りの情報を信じ、陛下が私を気に入っていると勘違いしているはずだ。だから私を排除しようと裏で動いているだろう。

そう思つて、侍女たちに頼んで何度も探りを入れていく。それにもかかわらず、いまだに尻尾はつかめていない。

リアンカ様が何かを企んでいるというのは、私の思いすごしなのだろうか。

いや、もしかしたら私が育てた優秀な侍女たちでも尻尾をつかめないような、有能な手駒がリアンカ様の傍にいるのかもしれない。

そんな危険な存在を野放しにしていたら、後宮が大変なことになってしまう。陛下も正妃を選ぶどころではなくなるだろう。

だから私は、ある手を打つことにした。

「ごめんね、フィーノ。危険かもしれないけれど、リアンカ様のことを探りに行ってもらえないかしら？」

そうフィーノに頼んだ。

リアンカ様はベツカ様が処罰されてから、目立った動きを見せていない。いまのところ、後宮は平和だ。

何も問題が起きていないのなら、静観するのも一つの手かもしれないけれど、私はそうはしない。こちらから動いてこそ、得られるものがあるのではないかと思うからだ。

いままでフィーノたちは、リアンカ様付きの侍女たちからそれとなく話を聞くなどして情報を集めてくれていた。

けれどその成果が得られていない以上、方法を変える必要がある。

「リアンカ様は必ず何かを企んでいるはずよ。けれど彼女が妃である以上、一人では

限りがあるわ。だからきつと誰かに指示をして代わりに動いてもらっていると思うの。彼女に張り付いて、その証拠をつかんできてちょうだい」

これはとても危険な任務だ。

いままでより、もつと物理的にリアンカ様に近づいてもらうことになる。

もしリアンカ様がフィーノたちのように訓練された人間を雇っていたら、探っていることに気づかれるかもしれない。そうだったら、ただでは済まないだろう。

それでも、彼女ならきつと何かつかんでくれると信じていた。

フィーノは私が育てた侍女たちの中でも腕利きだ。というか、連れてきた侍女は全員腕利きなのだけれど、彼女は四人のうちでもっとも諜報活動に長けている。

私はフィーノの実力を信頼していた。

「はい、レナ様。レナ様の頼みごととあれば、どんなことでもいたしますわ」

フィーノは私の言葉に対して、笑みを浮かべて頷く。

彼女たちは本当に私の自慢の侍女だ。

第二章

あれからフィーノは、私の傍にいることが少なくなった。

彼女が調査に専念できるよう、カアラたちがそれ以外の仕事を全て引き受けたのだ。

フィーノは、一日に一度か二度は私の前に姿を見せるけれど、あとは私の指示した通りリアンカ様のことを探ってくれている。

そんなある日、妃の一人であるディアナ様とお茶をする機会があり、念のため彼女にもフィーノがリアンカ様のことを探っていると話しておくことにした。

「まあ、そうなの。でもそれじゃあ、フィーノが危険じゃない？」

ディアナ様は私の話を聞くと、カップを置いて心配そうな顔をした。

彼女は王家と血のつながりがある、ゴートエア公爵家の娘で、陛下の幼馴染でもある。

後宮が開かれた当初は、最有力の正妃候補と目されていた。

けれどディアナ様には、騎士団長の一人息子であるキラ・フィード様という思い人がおり、そのことを知っている陛下はディアナ様のもとにだけは一切訪れていない。

ディアナ様が後宮に入ったのは、彼女が片思いしていたキラ様の気持ちを知るためだった。

なかなか素直に気持ち伝えてくれないキラ様にやきもきしていたディアナ様に、陛下が後宮入りを提案したのだそうだ。陛下はキラ様とも幼馴染で、ディアナ様が後宮に入ればキラ様が焦って何か行動を起こすだろうと考えたらしい。

ディアナ様と陛下のもくろみは成功し、キラ様は後宮まで彼女を迎えに来た。二人はめでたく両思いになり、もはやディアナ様には後宮に居続ける理由がない。

だというのに、彼女は私の手伝いがしたいと言って、ここに残ってくださいっている。

私にとって心強い協力者の一人だ。

「危険……かもしれせんわ。けれど私は……陛下のために全力を尽くすことを全力でやりたいと思っています。私が後宮にいられるのは陛下が正妃を選ばずまでの間だけですし、何より私が少し躊躇った結果、陛下の不利益になるようなことが起きたらと考えると、何かせずにはいられせんわ」

私は自分の決意を伝えるように、ディアナ様の目を見つめて言う。

「それに早くこの件を片づけて、陛下が誰を正妃にしたいと思っているのか突き止めたいのです。

リアンカ様を警戒しながら、陛下の本心を探ることは難しいですから」

ディアナ様はしばらく沈黙したあと、ふっと柔らかく微笑んで口を開いた。

「……本当にレナ様はアースのことが大好きですわね」

「だ、大好きって……それは、確かですけども……」

「そうやって赤くなるどころも、とても可愛らしいですわ」

再びお茶の入ったカップを手に取りながら、ディアナ様は楽しそうに笑っている。

微笑ましいものを見るような目で見られて、私は余計に恥ずかしくなる。

「も、もう、そんな風にかかわらないでください。それよりも、リアンカ様のことを探るフィーノのバックアップをお願いしますか？」

「ええ、それはもちろんですわ。私の侍女たちにも、フィーノの手助けをするよう指示しておきます」

ディアナ様は幼馴染という関係を生かし、陛下と直接情報のやり取りをしてくださっている。自分の侍女の中から手勢を割いて、情報収集や護衛の手伝いをしてくださることもあった。

ディアナ様も私と同じように、そういう訓練を受けた侍女を後宮に連れてきているのだ。

そんな彼女にフィーノのことを頼み、そのあと少し雑談を交わした。

話題はいま人気の恋愛小説作家、ティーンについてだ。

ティーンを書く小説は庶民だけでなく貴族女性の間でも評判で、私とディアナ様も大好きなのだ。そして、ティーンは覆面作家でもあった。読者の間では二十代の女性ではないかと噂されているものの、その正体は謎に包まれている。

「早くティーンの新作が読みたいですわ」

ディアナ様がそう言って切なそうにため息をつく。その表情からは、彼女が新作を心底待ち遠しく思っていることがわかった。

「そういえば、最近新しい作品が出ていませんわね。いつものペースだと、そろそろ出てもおかしくない時期ですわよね？」

私はそう答え、次はどんな物語なのだろうかと二人で予想し合う。それから後宮に関する情報をいくつか共有して、私はディアナ様の部屋を辞した。

フィーノに指示を出してから、一週間ほど経過した。

私は自室の椅子に座りながら、調査に向かわせたフィーノの帰りを待っている。

日はとくに暮れていて、夕食の時間も過ぎてしまった。

いつもは朝と夕方には必ず顔を見せるのに、今日は一度も姿を見ていない。

何かあったのだろうか。

嫌な予感がした。

リアンカ様は、私に対して思うところがあるはずなのに、相変わらず何もしてこない。

ベッカ様が処罰されるまで行っていた、他の妃への嫌がらせさえもなくなった。

フィーノが情報収集をしてくれているけれど、成果は得られていない。やはりリアンカ様は何も企んでいないのだろうか。けれど私は、彼女の手駒がフィーノ以上に有能だったら……という可能性を考えてしまう。

妃の一人ではない私が動かせる駒は、この後宮の中では少ない。私のテリトリーでないこの場

所では、情報収集をするにしても限界があった。

ディアナ様たち協力者にも情報収集を頼んでいるが、そちらからも情報は得られていなかった。

「フィーノさん、遅いですね」

後宮から派遣されている侍女の一人がそうつぶやいた。

彼女たちはもともと王宮で働いていたので身元こそ確かだけれど、だからといって簡単に信用できるわけではない。悪気はなくても、彼女たちから私に不利な情報が漏れるかもしれないのだ。

だから彼女たちには、私がフィーノに何をさせているのかも教えていない。彼女には特別な仕事を頼んでいて、しばらく私の傍から離れるとだけ伝えてあった。

「そうね……」

私は侍女の言葉に一言だけ返す。そしてしばらく考えてから、また口を開いた。

「貴方たちはもう下がってもいいわ。あとのことはカアラとメルに頼みます」

何か不測の事態が起きた時に私とカアラたちだけですぐ対応できるようにと、後宮から派遣された三人の侍女を下がらせる。

申し訳ないけれど、彼女たちはこの場にはいないほうが都合がいいのだ。

心配そうな顔をしつつも退出していく彼女たちを見ながら、私は情報収集に向かわせたフィーノのことを思う。

リアンカ様について深く探ってもらおうというのは、危険な行為だ。自分が命令したことではある

けれど、フィーノが何か危ない目にあっていないかと心配で仕方がない。

嫌な予感を振り払うため、少しだけ散歩をしようと部屋の外に出た。できるだけ身の危険がないよう、人目につきやすい中庭に向かうことにする。

ゆっくり歩く私の後ろから、カアラとメルがついてきた。

後宮は王の妃たちの集う場所ということもあり、とても綺麗きれいに整えられている。特に中庭は、色とりどりの花が咲き誇っており、まるで絵画のように美しい。

私は不安になる心はどうにか落ち着けたくて、その美しい光景を見つめた。そうしていると次第に胸のざわつきが収まってくる。

しばらく庭を眺めていたら、後ろから誰かの足音が聞こえてきた。

「レ、レナ様」

その声を聞いて驚いた。聞き間違いではないだろうかと思う。

けれど振り向いた先には、思った通りの人物——エマーシエル様がいた。

どうしてエマーシエル様が、私に声をかけてくるのだろうか。

そんな疑問が生じたのは当然のことだった。

私はエマーシエル様のことを一方的に気にかけているけれども、侯爵令嬢である私と男爵令嬢である彼女は、気軽に声をかけ合うほどの仲ではない。

もしかして、陛下がエマーシエル様のもとへ通っていることを私が意図的に隠しているのに気づ

いて、抗議でもしに來たのだろうか。

そんな風に勘ぐってしまったけれど、私を見つめるエマーシエル様の目には敵意など感じられなかった。

エマーシエル様がどういうつもりで声をかけてきたにせよ、私と話しているところを誰かに見られてはまずい。

この中庭は建物の中からよく見える。こうしているいまも、誰が見ているかわからないのだ。

陛下が私のもとへ通っているという噂が流れているため、私は後宮中から注目されている。そんな私がエマーシエル様と親しくしていると誤解されれば、リアンカ様にとって彼女は気に食くわない存在になりうる。

私は協力者であるディアナ様たちとでさえ、あまりおおびつらに交流していないのだ。

それに、ディアナ様たちなら万が一誰かに狙われたとしても、彼女たち自身の力で対応できるが、エマーシエル様には無理だろう。

エマーシエル様を守るためには、一刻も早く彼女から離れなければ。

そう考えていると、エマーシエル様がおどおどした態度で口を開ひらいた。

「あ、あの、私……」

「エマーシエル様、私に話しかけてはいけませんわ」

私は彼女を冷たく突き放した。

少しでも楽しそうに話しているところを見られれば、それだけで私が彼女を特別に気にかけているように見えるだろう。

そんな風に思われてはいけない。むしろ、興味が無いという態度を示さなくては。

「え、あの……」

エマーシエル様はやや面食らったようだった。けれど話をやめるつもりはないらしい。何かを言おうと、口を開いたり閉じたりしている。

「私と話しては、貴方が狙われてしまうかもしれないわ。だから失礼いたしますわね」

エマーシエル様が悲しそうな顔をしているのを見ると、悪いことをしたという気分になる。

でも、エマーシエル様のことを守るためには、心苦しくとも突き放さなければならない。

こうすることが、ひいては陛下のためになるのだ。

愛するあの方のためなら、私はいくらでも心を鬼にする。

「……待って！」

エマーシエル様が、私の手をつかんで引き留めようとした。

そんな彼女に私は告げる。

「エマーシエル様、軽率なことをしてはいけませんわ。私には今後一切、話しかけないようにしてくださいませ」

エマーシエル様は少し怯えたような顔をしたが、私は彼女の手を振り払って背を向けた。

エマーシエル様と仲良くしていると勘違いされるくらいなら、彼女を疎んでいられるほうがいい。がまだいい。

今回のことが誰かに見られていて、余計な誤解をされなければいいのだけれど……

そんな心配をしながら、私は自分の部屋へと戻るのだった。

「フィーノさん、まだ帰ってきていないのですか？」

後宮から派遣されている侍女の一人が、心配そうな顔をして尋ねてくる。

昨晚エマーシエル様と別れたあと、部屋ですつとフィーノの帰りを待っていたのだが、朝になっても彼女は戻ってこなかった。

「そうね」

自室でのんびり紅茶を飲んでるように見せかけつつも、私は内心フィーノのことが心配でたまらなかった。

たった一日戻ってこなかっただけで大げさかもしれないが、どうも胸騒ぎがする。もちろん、任務の都合で戻ってこれない可能性は十分にあるけれど。

普通なら裏切りを疑わなければならない状況でもあるが、あの子が私を裏切ることなど絶対にない、私は確信していた。

あの子は絶対に私のもとへ帰ってきてくれる。

……だからこそ、帰ってこないという事実は私の心を不安にさせた。もしかしたら、あの子は死んでしまったのではないかと。

生きてさえいてくれれば、それでいい。生きてさえいればどうにでもなる。でも死んでしまったら、どうしようもない。死ねば、そこで何もかもが終わってしまう。

「レナ様は……フィーンさんのことを大切に思っているわけではないのですね」

後宮から派遣されている侍女の一人がそんな風に言った。彼女たちは私の上辺の態度を見て、私がフィーンを大切にしていけないと判断したのだろう。

大切に決まっている。

フィーンとは幼い頃からずっと一緒だったのだ。ずっと一緒に育ってきたのだ。

陛下の力になりたいという私の我儘な願いを叶えるため、力になろうとしてくれている。

私の、可愛い侍女。

そんな彼女を、大切に思っていないわけがない。

「そう思うなら、それで構わないわ」

後宮という陰謀渦巻く場所で貴族に仕えているにしては、彼女たちは素直すぎるように思う。

貴族とは、自分の感情を簡単に表に出さないものだ。些細なことでも、弱みになりかねないのだから。

特に陛下の妃という立場ならば、余計にそういうことに気をつけなければならない。

だから、私は動揺していることを悟られないよう、仮面をかぶっている。

泣きたくても、泣いたりしない。

フィーンがいまどんな状況にあるのかはわからない。

でも、私は決して立ち止まりはしない。立ち止まることなど、できるわけがない。

そんなことをすれば、いままで積み上げてきたものが無駄になる。

私は、陛下の幸せのためならなんだってやってみせると決めたのだ。

それと同じ気持ちで、フィーンも私に対して持ってくれている。

だからフィーンも私のために、目的を果たして帰ってきてくれるはずだ。

*

私はフィーン。

侯爵令嬢レナ・ミリアム様に仕える侍女だ。

一週間前、私はレナ様の命令を受けて、リアンカ様のことを徹底的に探ることになった。

私がレナ様の侍女だということは、リアンカ様も知っている。

だから、私がリアンカ様に近づいて情報を探るのは危険なことだ。顔を見られてしまえば、それで身元がバレてしまうのだから。

でも、危険だったとしても、大好きなレナ様のためならなんでもしたかった。ここ一週間、私はずっとリアンカ様に張り付いている。

けれどめぼしい情報が得られなかったため、今日は彼女の部屋を探ることにした。いま、リアンカ様は自分のお気に入りの妃たちのお茶会に出かけている。

その間に、私は部屋の中へと侵入した。

こうして他の妃の部屋に忍び込むなんて、とても緊張する。

もしリアンカ様が帰ってきたら？

誰かに見られてしまったら？

そんな心配はあるけれど、情報収集は必要なことだ。

私はまず、机の引き出しを開ける。

悪事の証拠になりそうな書類でも入っていないだろうか。

なんでもいいからレナ様のためになる情報が欲しくて一生懸命探す。けれど、見つからなくて焦りが出てくる。

その時、部屋の外から話し声が聞こえてきた。

リアンカ様が帰ってきたのかも思わないと思って、私はベッドの下へと隠れる。

そこは一人がやつと入り込めるくらいの隙間しかない。

ベッドは大きいわりに高さがないので、誰かが覗き込まない限り見つかることはないだろう。

そうして隠れていると案の定、部屋の扉が開いて誰かが入ってきた。二人分の足が見える。

「ああもうっ！ 腹が立つて仕方がないわ。どうして上手くいかないのかしら」

苛立ったような声でした。リアンカ様の声だ。

リアンカ様は私が隠れているベッドに腰掛けたようで、ドサツという音がした。

「本当にレナ・ミアムが気に食わないんだね」

今度は聞き覚えのない男の声がした。成人した男の声というよりは、まだ成熟しきっていない若い男の声だ。

「当然よ。いつも澄ました顔をして、忌々しいったらありやしないわ。この間もあの女は——」

リアンカ様はレナ様の悪口を言っていた。

話している相手は誰なのだろうか。

私はベッドの下で一心に耳を澄ます。

姿を見ることはできないけれど、会話の内容や言葉遣いなどから、何かつかめるかもしれない。

それにしても、後宮の自室に男を入れるなんて……リアンカ様もベツカ様のように情夫を連れ込んでいたということなのだろうか。

そのわりには、リアンカ様と男の会話に甘い雰囲気はないけれど。

「方法はなんでも構わないわ。とにかく、レナ・ミアムが正妃になれないようにしてほしいの。いままでに雇った者たちは成果を上げられなかったけれど、貴方には期待しているわ」

その言葉を聞いて確信する。

やはり彼女はレナ様を害そうと動いていたのだ。

「了解。けど、俺は自由に動かせてもらうよ」

男はリアンカ様に雇われているようだが、仮にも陛下の妃である女性とこんな風に軽い口調で話すとは。

この男は一体何者なのだろう。

どういう立場の人間なのか、さっぱり想像ができない。

そんなことを考えながらも、息を殺して耳を傾け続ける。

けれどそのあと、男はリアンカ様に退室を告げて、以降彼の声はしなくなった。窓から出ていったのだろうか。

どちらの方向に去ったのか気配を探ろうとしたけれど、なぜかつかめなかった。

この私が気配をたどれないなんて……

どうやら彼は相当な手練らしい。

リアンカ様の悪事の証拠にはならないけれど、やっとつかんだ情報だ。

このことを早くレナ様に伝えたいと思うけれど、リアンカ様はなかなか部屋から出ていってこない。
逸る気持ちを抑えながらしばらく待っていると、やっとリアンカ様が出ていった。

私は急いでベッドの下から這い出し、部屋を飛び出そうとする。

けれど、ドアノブに手をかけようとしたとき……
「どこ行くの、鼠ちゃん」
男の声と共に、突然私の視界はブラックアウトした。

*

フィーノがいなくなってから、二日が過ぎた。

カアラがフィーノの捜索から戻り、私に報告を上げてくれる。

フィーノの足取りはつかめなかったが、王宮のほうでは人がバタバタと行き来していて、慌ただしい様子だったそうだ。

何か起こったのだろうか。

「それについては、もう少し詳しく事情を探ってもらえるかしら？　その他に何か変わったことは起きていない？」

私がそう尋ねると、カアラはもう一つだけ、と別の報告を始めた。

「最近アマリス様の侍女が、私たちの動きを注視しているようですわ。ただ情報を把握するためだけに動いているようなので特に問題はないと思いますが、念のためお伝えしておきます」

「まあ、そうなの。私も問題ないとは思うけれど、一応動向は見ておいてね」

アマリス様はレギオン侯爵家の令嬢である。

彼女は私よりも一つ年下で、後宮にいる妃の中でも若いほうだ。

後宮に入る前から、社交パーティーにも出席しない変わり者のひきこもり令嬢として有名だったのだけれど、後宮に入ってからもう部屋にこもっていることが多い。

それだけでなく、彼女は何かと理由をつけて陛下の夜伽を拒み続けている。

どうやら正妃になるつもりがないようだ。

ただ、流石は侯爵令嬢と言うべきか、後宮の情報収集は怠っていないらしい。私が自ら狙われる立場になっていることも見抜いていて、危険だと忠告しに来てくださったこともある。

「アマリス様のことはひとまず置いておくとして、王宮で何が起きたのかを早急に確認してきてくれるかしら？」

私がカアラにそう頼むと、彼女は静かに頷いて部屋を出ていった。

それから私は、なんとなく落ち着かなくて散歩に行くことにする。

部屋の外に出ると、なんとリアンカ様が待ち構えていた。

「ごきげんよう、レナ様」

「ごきげんよう、リアンカ様」

私の後ろに控えていたチェリとメルが、リアンカ様を見て警戒している気配がする。

当然だろう。フィーノがいなくなったこのタイミングで部屋の前で待っているなんて、どうしても警戒せざるを得ない。

「レナ様、最近調子はどうかしら？」

「おかげさまで、なんの問題もありませんわよ」

「問題がない？ あらあら、貴方は冷たい方なのね」

リアンカ様は楽しそうに笑っている。私の反応を面白がっているように見えた。

「何を根拠にそのようなことをおっしゃるのかしら」

「私は事実を言っているだけですわよ？ だってそうでしょう？ 親しい人が一人いなくなっても、

貴方は平然としているんですもの」

その言葉を聞いて、私は体にぐっと力が入るのを感じた。

「まあ、そんな怖い顔をしないでくださいさる？ 私は貴方を心配しているのよ」

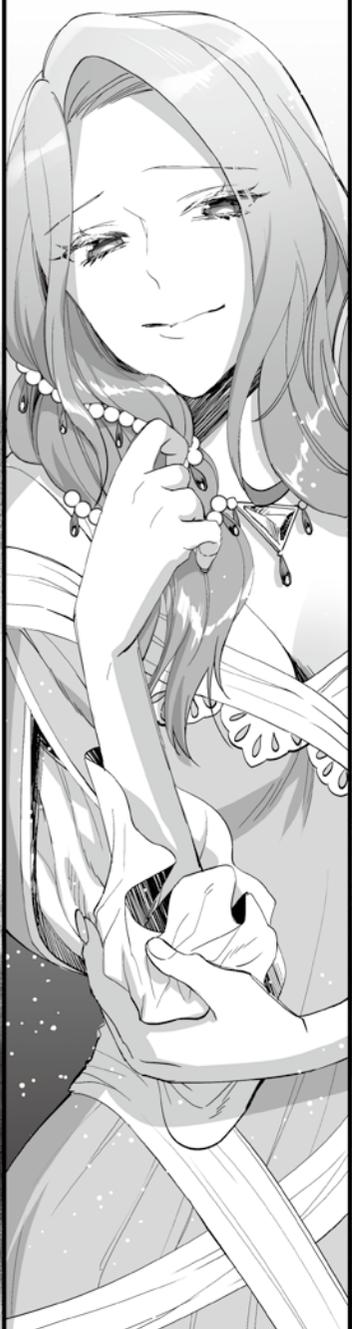
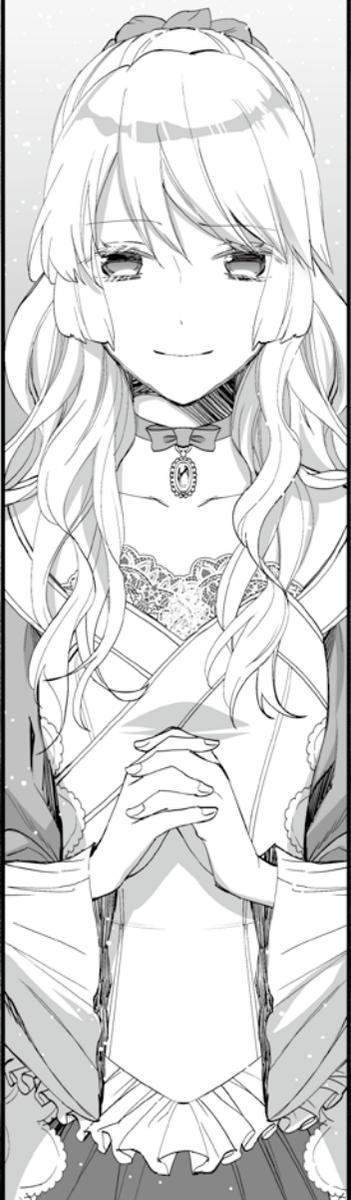
顔がこわばっていたらしい。私は内心の動揺をなるべく表情に出さないように気を引き締めた。

「心配？」

「ええ。だってレナ様の大切な侍女がいなくなったのでしょうか？」

「……どうしてご存知なのですか？」

「あら、レナ様がいつも仲良くしていらっしやる侍女の姿が最近見えないので、そうかもしれないと思っただけですわ。本当にいなくなってしまうんですの？」



リアンカ様は心配そうな表情を浮かべているが、白々しいしらしらと感じてしまう。
彼女は静かに近づいてきて、私の耳元で囁いた。

「このまま後宮にいたら、いま以上に大変なことになるのではなくて？ もっとご自分の身の安全をお考えになったほうがよろしいと思いますわ」

これは脅しだ。危険な目にあいたくなかったら、後宮から出ていけと言いたいのだろう。
けれど、こんな脅しに屈するわけにはいかない。

「……そうかもしれないですね。でもご心配には及びませんわ。私はこれから用がありますので、ここで失礼いたしますわね」

やっばり、フィーノの件にはリアンカ様がかかわっている。

私は今回の件でそう確信した。

とはいえ、それを証明できる決定的な証拠は何もない。

私はももんとしながら、あてもなく後宮の廊下ろうかを歩いていた。

フィーノを表立って探すことができず、リアンカ様への対処もできない。それが歯がゆかった。

フィーノが戻ってこないことは、まだ誰にも言っていないかった。彼女の身に何かあったわけではなく、任務の都合で戻れないだけかもしれないと考えていたからだ。

たとえリアンカ様が怪しくとも、もう少し状況がはつきりするまで騒ぎになるようなことは避けたい。

そういえば王宮のほうが騒がしかった件についても、まだ原因がわかっていない。

色々なことが上手くいかず、もどかしい気持ちになりながら、後宮をぐるっと一周したあと自分の部屋へと戻った。

すると後宮から派遣されている侍女の一人が、一通の手紙を渡してきた。

「ディアナ様より、お呼び出しの手紙です」

そう言われて、なんの用だろうか考える。

ディアナ様は、何か気になる情報をつかんだのだろうか。

私は手紙の内容にさっと目を通すと、メルとチェリを連れてディアナ様の部屋に向かった。

部屋に入ると、そこにはディアナ様と、腹心の侍女二人しかいなかった。いつもは何人も侍女が控えているのだが、いまは下がっているようだ。呼び出しの理由は、内密の用件なのだろう。

「ごきげんよう、ディアナ様」

私は挨拶をして、ディアナ様の向かいの椅子に腰掛ける。

「それで、本日はどんなご用でしょうか」

前置きもなしに、私はそう問いかけた。

「この後宮の一角で魔力が感知されたそうです。お心当たりはございますか？」

ディアナ様の言葉を聞いて、私は嫌な予感がした。

この世界には魔法というものがあり、それを使えるのは『魔力持ち』と呼ばれる人だけだ。

『魔力持ち』の存在は非常に稀で、平民よりも王侯貴族の血筋に生まれやすい。ちなみに、ディアナ様や陛下は『魔力持ち』である。

私が実家から連れてきた四人の侍女たちも『魔力持ち』だ。平民であるにもかかわらず魔力を持つている彼女たちを見つけたのは、とても幸運なことだったと言えるだろう。

魔法は非常に便利なものだ。攻撃にも使えるし、自分の姿をくまらせるようなこともできる。

とはいえ危険なものでもあるので、王宮の敷地内で魔力を使えば感知されるようになっていた。

魔力が感知されると、ちよつとした騒ぎになってしまう。それに侍女たちが『魔力持ち』であることはあまり人に知られなくなかった。

だからよほどの事情がない限り、私の侍女たちが魔力を使うことはない。

けれど……

「……実は一昨日から、フィーノが戻ってきておりません。『魔力持ち』は稀な存在ですし……もしかししたら彼女が魔力を使ったのかもしれませんが」

「まあ……それでは、リアンカ様のことを探っていて……?」

「そうだと思います。彼女の身に何かあったのでしょうか」

私も詳しいことはわからない。でも、もしフィーノが魔力を使ったとすれば、それだけ危険な目にあっただろう。

だが魔力が感知されたなら、少なくともその時点までフィーノは生きていたということだ。

「残念ながら魔力が感知された場所までは突き止められておらず、その後の調査でも大した手がかりはつかめていないそうです」

「そう……なのですか」

危険な状況に陥ったものの、魔力を使ってどうにか逃げおおせたのか。それとも捕まったあげく――殺されたのか。

フィーノのことを思うと胸が苦しい。

「王宮側がもう少し上手く後宮の採めごとに対処できていれば、レナ様にこんな負担をかけることもなかったでしょうに……」

「陛下も政務があつて大変でしょうから、そのあたりは仕方ありません。何より、私は自ら進んで動いたのです。後悔はありませんわ」

ディアナ様の言うことは正しい。

でも、私が望んでやったのだ。あの方の力になりたくて、行動を起こした。それで痛い目にあつたとしても、自分の責任でしかない。

「そうですか……。それで、フィーノは見つかりそうですか？」

「……わかりません。侍女たちに探させてはいますが、まだなんの報告も来ていません。いまのところ、これ以上大きく動くわけにもいきませんし……」

「でしたら……私のほうからフィーノのことを王宮に報告してもよろしいでしょうか」

必要以上に事を大きくしては陛下の迷惑になるだろうから、できれば王宮への報告はしたくなかつた。

ただでさえお忙しい陛下の手を、煩わせたくはない。

でも、そんな私の考えを見透かしたようにディアナ様は言う。

「アースに悟られずに動きたいという気持ちはわかりますが、事はもう十分大きくなっておりまして、下手をすればフィーノの命にもかかわりますわ」

「……実は先ほど、リアンカ様とお会いしました。私が部屋から出てくるのをわざわざ待っていたようで、フィーノのことも何か知っている様子でしたわ」

私はリアンカ様が言っていたことを、かいつまんでディアナ様に伝える。

「まあ……。そういうことでしたら、なおさらすぐに動くべきですわ。王宮に協力をあおぎましょう。人手は多いに越したことはありません」

「……はい。お手数おかけしますが、よろしくお願ひします」

私がそう頼むと、ディアナ様はすぐに陛下への手紙を書いてくれた。

念のためサンカイア様にも知らせておこうと、ディアナ様はもう一通手紙を書く。

サンカイア様も妃の一人で、ディアナ様と共に私に協力してくれている。

彼女は豪商の娘であるため、あらゆる情報に通じていた。商人である彼女とその実家の情報収集能力には、私も舌を巻くほどだ。

ディアナ様は書いた手紙をそれぞれ侍女たちに持っていかせると、ふっと一息ついて口を開いた。「それにしても、リアンカ様が証拠も残さずにこれだけ動ける方だとは思いませんでした」

私もリアンカ様の尻尾をつかむのに、こんなに手こずるとは思わなかった。

「そうですね……あのフィーノをどうにかできるほどの手練が傍にいるようですし」

フィーノは私が育てた優秀な侍女で、戦う能力も十分持っている。お兄様に仕える武闘派の執事たちとも対等に渡り合えるくらいだった。

そんな彼女が負ける場所は、あまり想像したことがない。

リアンカ様の侍女たちの中には、フィーノとやり合えるような者はいなかったはずだ。とすると、彼女は誰か外部の人間を雇っていることになる。

「レナ様、本当に気をつけてください。貴方は狙われていますわ」

「ええ、わかっています。自分から狙われるように仕向けましたから」

「……アースのためと盲目的に頑張るのも結構ですが、レナ様の身に何かあったら私は悲しいですもの」

「心配いりませんわ。なるべく私自身に危険が及ばないよう動くつもりです。私は死ぬつもりなどありませんから」

はつきりと言いつつ。そうやすやすと死ぬつもりはない。

もちろん、私の命一つで陛下の役に立てるのなら、喜んで差し出そうとは思っているけれど。

いまは死ぬより、生きているほうが陛下の力になれる。

「本当に、無理しないでくださいね」

「ええ」

ディアナ様とそのような話をして、私は彼女の部屋をあとにした。

*

「……フィーノが行方不明とは……どうにかしなければなりませんね」

レナ様が部屋を出ていったあと、私——ディアナはそうつぶやいて思案する。

フィーノはリアンカ様のことを探っていて行方不明になったのだから、状況的に考えてリアンカ様があつとも怪しい。レナ様を待ち伏せしていた時に言ったことも、ますます彼女を疑わしくしていた。けれど、リアンカ様が黒幕だとわかるような証拠は何もない。

よつぼど巧妙に隠しているのか、雇っている者が有能なのか。

そんなことを考えていると、隣に控えていた腹心の侍女が口を開いた。

「レナ様の侍女たちは相当鍛えられているように見えました。その侍女が戻ってこないとなると、相手はよつぼどの手練なのでしょう」

「そうね……後宮の警備も、もう少し強化されればいいのだけど」